

この度の松山へのご用命、誠にありがとうございます。

能楽の楽しみ方は多様にありますが、松山からの一押しをお伝えしたいと思います。
それは、「演目事の構成を知る事」「移り変わるモノを素直に受け留める事」です。

どんなにゆっくりを感じる時でも舞台には流れがあります。
起承転結、喜怒哀楽、他にも様々な変化が個々の感性を直撃する。
それが芸能で、古典・現代の違いはなく、能楽でも同じです。

先日、何度かオペラを観る機会に恵まれました。
そこで感じたのは、演目毎にテーマをもって、頑なまでにソレを狙い続けている。
技法は違って能楽と同じ手法だと肌で感じました。

演劇を通して、人の心を動かす事、これは演技者の課題です。
私も能を演じる時に、「あとさきの布石」や「狙い所」を探して演じています。
当日、皆様に多くの情報を舞台から得て頂けるように事前にお伝えする、マル秘レジュメ。
是非、ご一読ください。

～演目共通のみどころ

まず、客席にせり出した能舞台を眺めて想像してみてください。
柱と屋根で囲まれた立方体の舞台空間、この空間がこれから如何様に彩られていくのか。
いざ観能が始まれば、一演者に焦点を合わせることも、少し引いてパノラマの視野で眺めることも
お客様に委ねられ、限りなく自由に色彩を感じる事が出来ます。

演者の舞台への登場は左(下手)^{しもて}と右(上手)^{かみて}から、
下手には五色の幕があり、陰陽五行説を意味していて、この世とあの世を区別するモノ・・・
当日の能では「嵐山」は蔵王権現、「杜若」は花ノ精、「藤戸」は地獄の亡者が登場します。
和装(紋付き袴)の者達はオーケストラピットに入っている楽隊たる者達です。
作品中の登場人物ではありませんが、舞台の一部となって舞台を作り上げます。

それでは、作品のご紹介。

能「嵐山」

帝の臣下が勅命により嵐山の桜の花を見に訪れる。そこで花守の老人夫婦に出会い勅使が尋ねると、
この花は神木で、吉野山の神が来現すると言い、自らが子守明神と勝手明神であると告げ、姿を消す。
やがて本体の神が現れ、吉野ゆかりの桜花に戯れ、さらに蔵王権現が現れ、蔵王・子守・勝手の三体は
一体分身と伝え、栄え行く世のめでたさを讃えます。

狂言「雷」

都のヤブ医者が 東へ旅する途中、雷様が落ちて来ます。雷様は、腰を打ち、医者に治療せまります。
医者は治療費を請求し長い間、国土安穏を約束し帰って行きます。

能「杜若」

こちらは私自身^{わたし}の心掛けと見所を書きます。

作者は金春禅竹、世阿弥の娘婿にあたる人物ですので600年ほど前の作品ということになります。
世阿弥の目指した「幽玄」の演出が強く受け継がれた一曲です。
能楽の大成者とされる世阿弥の作品の特徴は、「本説」より導き出された「構成力」、感性溢れた「謡」と「舞」。
この曲の「本説」は「伊勢物語」となります。これを中心に、在原業平と杜若を関連付けています。

「かきつばた」の五文字を句頭に詠んだ「から衣着つつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」の和歌がこの作品の軸となっていますが、伊勢物語第九段の東下りは、業平と目される「昔男」が都を離れて東国へと下り、旅先で都に残してきた人のことを思って和歌を詠み、一行が涙にくれるという話です。

この東下りの段には、「隅田川」(観世元雅作)で重要な役割を担っている和歌「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやとも」も収められています。ともに東下りの段から想を得ていても、元雅と禅竹では作能の方向性が大きく違う点も面白いところです。「幽玄」の「儂い美しさ」をお楽しみください。

～あらすじ

諸国遊暦の僧が、訪れた三河国八橋は伊勢物語の東下りに有名な杜若の名所である。そこで一人の女性に遭遇し、所の謂れなどを聞き、その女は泊まりの宿にと、僧を自らの庵に招きます。やがて女は在原業平と二条の後の形見の衣装を身に纏い自分が杜若の花の精である事を告げ昔語りを舞い語り夜明けと共に御法による成仏を現し消えます。

登場人物はシテの杜若ノ精(松山です)と、ワキの僧、二人だけから構成されます。

～舞台進行

・諸国遊興の僧が都見物の後、東国に向い三河に着きます。
「これは諸国一見の僧にて候。われ此間は都に候ひて。洛陽の名所旧蹟残りなく一見仕り候。又これより東国行脚を志し候。タベタベの假枕。タベタベの假枕。宿はあまたに替れども。同じ憂寝の美濃尾張。三河の国に着きにけり。三河の国につきにけり。

～舞台のなかを謡歩むことで、京都から静岡へと場面が転換されます

・頃は杜若の盛りで、足を留めて花に見惚れます。
「げにや光陰とどまらず春過ぎ夏も来て。草木心無しとは申せども。時を忘れぬ花の色。顔佳花とも申すやらん。あら美しの杜若やな。

～空の景色を眺めながら、徐々に花に見初めていく様子です

・一人の女性が僧に声を掛け、伊勢物語の東下りで業平が和歌に「かきつばた」を詠んだ場所だと話します。
「げにげに三河の國八橋の杜若は。古歌にも詠まれけるとなり。何れの歌人の言の葉やらん承りたくこそ候へ。伊勢物語に曰はく。此処を八橋といひけるは。水行く川の蜘蛛手なれば橋を八つ渡せるなり。その澤に杜若のいと面白く咲乱れたるを。或人かきつばたといふ五文字を句の上に置きて。旅の心を詠めと云ひければ。唐ころも着つつ馴れにし妻しあれば。はるばる来ぬる旅をしぞ思う。これ在原の業平の。此の杜若を詠みし歌なり。

～折句という技法で和歌の句の頭文字を「かきつばた」で読み上げます

・女は泊まりの宿にと、僧を自らの庵に招き、女は業平と二条の後の形見の衣装を身に纏い現れます。

～中入り無しの一場面の設えながら舞台上で着替え、業平の冠・二条の後の衣を身に着け大きく扮装を替えワキとシテの対話形式から、シテ一人の舞語りへと趣を移します

・女は杜若の精であると明かし、業平の和歌に詠まれた草木は仏法の恵みにて成仏出来ると語ります。
「実はわれは杜若の精なり。植ゑおきし昔の宿の杜若と。詠みしも女の杜若に。なりし謂の詞なり。また業平は極楽の。歌舞の菩薩の化現なれば。詠みおく和歌の言の葉までも。みな法身説法の妙文なれば。草木までも露の恵の。佛果の縁を弔ふなり。

・伊勢物語と杜若。

「然れども世の中の、一度は榮え。一度は、衰ふる理の真なりける身のゆくへ。住みどころ求むとて、東の方に往く雲の、伊勢や尾張の海面に立つ浪を見て。いとどしく過ぎにし方の恋しきに羨ましくも帰る波かなとうち詠め行けば信濃なる。浅間の嶽なれや。薫る煙の夕景色。さてこそ信濃なる浅間の嶽に立つ煙遠近人の見やは咎めぬと口ずさみなほはるばるの旅衣。三河の國に着きしかば。ここぞ名に有る八橋の。澤辺に匂う杜若。花紫のゆかりなれば。妻しあるやと思ひぞ出づる都人。然るに此の物語。その品多きことながら。取別きこの八橋は。三河の水の底ひなく。契りし人々の数々に。名を変へ品を替へて。人待つ女物病み玉簾の。光も。乱れて飛ぶ螢の。雲の上まで往ぬべくは。秋風吹くと。かりに現れ衆生済度の我ぞとは知るや否や世の人の。暗きに行かぬ有明の。光遍き月やあらぬ。春や昔の春ならぬ我が身一つは。もとの見にして。本覚真如の身を分け陰陽の神といはれしも。ただ業平の事ぞかし。かやうに申す物語疑はせ給ふな旅人。はるばる来ぬる唐衣。着つつや舞を奏づらん。

序之舞

～今回は小書「恋之舞」となり、橋掛りで杜若を見込む情景描写が挿入されます。

・夜明けと共に僧の前から姿を消してゆきます。

「匂うつる。菖蒲の鬢の。色は何れ。似たりや似たり。杜若花菖蒲。こずゑに鳴くは。蟬のからころもの。袖白妙の卯の花の雪の。夜も白々と。明る東雲のあさ紫の。杜若の。花も悟の心開けて。すはやいまこそ草木国土。すはや今こそ草木国土。悉皆成仏の御法を得てこそ。失せにけれ。

～草木国土悉皆成仏は非情までもが成仏出来るとされる功德

※杜若の説明は、松山が日頃、座学講座「能楽ことはじめ」等で解説している様子となります。

講座ご興味の方はご連絡ください。

～仕舞とは能の一部を紋服姿で演じ、囃子は用いず謡のみで上演します。

「頼政」

舞と称しますが、頼政が一軍を指揮する様を「腰掛けて」演じる独特な趣を持つ演目です。

宇治川ノ合戦の様子を将たる器の大きさとともに戦語ります。

「邯鄲」

故事にも伝わる「邯鄲の枕」。少年・盧生が枕で見た夢は、王位を継承しその在位は五十年という。

しかしそれは夢幻、それによってこの世の理を悟ります。

「善界」

中国の天狗・善界坊が、日本の天台比叡山を魔道に陥れようとする。

しかし高僧の法力によって不動明王や日本の神々が現れ、善界坊は散々に懲らしめられ逃げ去ります。

能「藤戸」

源平ノ合戦にて佐々木盛綱は、馬で海を渡るという大功を立てた。後にその功績から備前国児島を賜る。

そして、現地に赴くと老女が現れ、わが子を殺めた事への訴訟を申し出る。やがて盛綱は当時を語り出す。

それは、海を馬で渡る事が出来たのは土地の男のおかげで、他に漏れないようにとその場で殺めたこと。

老女が母親だと知った盛綱は吊いを始める。そこに男の霊が現れ、当時の有様を現しながらも、仏法によって成仏する。いわゆる「反戦の能」として頻りに上演される一曲です。